



写真-1 平野橋から宇治川を撮影（平成31年4月）

■ 桜並木がきれいな宇治川沿い

写真-1は、堀割筋の平野橋から宇治川（うじかわ）を撮影したもので、ちょうど花見の時期だったので何組かのグループが河川敷で花見をしていました。（手前右の黄色い花はエニシダ）

表六甲河川の一つである宇治川は見るからに急勾配の河川で、両岸は石積護岸、河床も石張りでガチガチに固められています。平野橋の上流部では河川的环境整備が進められてきましたが、平成9（1997）年8月に水に親しめる親水広場が完成し、直下流の宇治川公園と共に、市民の憩いの場として親しまれています。

■ 昭和初期に生田川同様、ゴミの不法投棄を防ぎ土地の有効利用を図るため宇治川を暗渠化

『神戸市水害誌』によると、阪神大水害以前の宇治川は、再度（ふたたび）橋より下流が暗渠化されていました。再度橋より橋橋までは内法幅2.5m、橋橋から三越前までは3.7m、三越前から河口までは4mの暗渠になっていて、その暗渠上には、再度橋から橋橋までは4m、橋橋から東海道線までは14m、東海道線から三越前までは2m、三越前から臨港線までは22mの道路が整備されていました。では、いつ暗渠化されたのでしょうか。

宇治川については、昭和8（1933）年発行の『実地踏測神戸市街全図』によると、海から海岸通6丁目の神戸中央郵便局前までは開渠、そこから東海道線までは暗渠となっています。

東海道線以北については、すぐ北に長狭橋（ながさばし）、その上流に宇治川橋、橋橋の表記があるので開渠だったと考えられます。



写真-2 大正末期から昭和初期の三越前の風景
（『神戸今昔散歩』から引用）

ということは、東海道線以南の残された開渠部及び東海道線以北は、昭和 8（1933）年から昭和 13（1938）年の間に暗渠化されたことになります。

神戸中央郵便局前から東海道線までの暗渠部については、明治 36（1903）年発行の『神戸市新図』によるとすでに暗渠化されていて、大正 2（1913）年発行の『神戸市新図付姫路市新図』では暗渠上の道路を路面電車が走っています。この路面電車は、明治 43（1910）年に神戸電気鉄道によって、兵庫と神戸の両市街地を結ぶ路面電車として開業、大正 6（1917）年に神戸市に買収されて電気局（のちの交通局）が運営する市電になっています。

暗渠化の理由は、昭和 5（1930）年 9 月に暗渠化工事が完成した生田川と同様で、川へのゴミ投棄防止と地上交通の円滑化、それに防災対策を含めた土地の有効活用の 3 点と思われます。

■ 昭和 13（1938）年 7 月の阪神大水害で被災

『神戸市水害誌』第 2 編「水害状況」によると、宇治川上流域（再度谷・平野谷）の氾濫状況は概ね以下のとおりです。なお、宇治川の二級河川上流端より上流については「再度谷川」（図-1 参照）と呼んでいます。

宇治川の氾濫は 7 月 5 日午前 9 時から 10 時の間で、再度筋右岸において高さ 4m の護岸が 20m の長さにとって決壊したのは午前 11 時とされ、午前 11 時 30 分には最高水位に達したといわれている。

宇治川上流部の再度谷は、多くの小溪谷の水を集め、深谷池（西池）堤防の決壊をも受け、広範囲にわたる山崩れにより土砂・樹木・巨岩が流下、随所に流木が堆積し、激しい濁流は轟々として瀑布の落下するがごとき様で、登山口を併せて広大な谷となった。水勢は刻々増大し、午前 11 時 30 分には橋梁をも流失させ、兩岸の茶屋や家屋を破壊、山手高等女学校下の道路を削り去って約 40 間（≒73m）の大溪谷になり、大瀑布の落下するがごとく岩盤上を再度筋町に突入した。

突入した濁流は、閉塞した暗渠上を広さ約 50 間（≒91m）の川幅になって、まず右岸の 20 数戸を呑みこみ、さらに勢いを増して宇治野山の台地にぶつかってほぼ直角に西折、川に沿って凶暴を逞しくし、2 丈（≒6m）を超える濁流が堀割筋以東の兩岸数百戸の人家を全く見る影もなく翻弄、凄絶（せいぜつ）の限りを尽くしているが、堀割筋を越えるやその川幅は約半分に減じ、そのために却って勢いを増し、さらに数十戸を流失・全壊させた。

一方、平野谷より菩提池を経て流下する平野谷川は、その前日すでに轟々たる地鳴りを聞いたが、この日午前 9 時頃さらに一大地鳴りと共に濁流はその深い谷を流下し、標高 50m 付近に至って民家に凶暴の手を振るい始め、楠谷町においては川幅が 10 間（≒18m）から 50 間（≒91m）に広がり、東西に走る道に架けられた土橋を落下させ、一瞬にしてその道路沿いの家屋を呑み、あるいは全半壊させ、これを埋没させて東西に扇状に広がり本流と合流した。



写真-3 宇治川ガード下より三越
付近の惨状（『兵庫の河川事業 50 年の歩
み』から引用・加工）

このため、合流点における平野谷川は川幅 80 間（≒145m）に達し、矢部町東部の民家は悉く災害を被った。

平野谷川を合わせた宇治川の濁流は、馬場町で直角に南折し、宇治野山と大倉山の間の暗渠兩岸に建てられた家屋は悉く被災した。なお、暗渠内はほとんど土砂が充満していたようである。

■ 被害を拡大させた溜池の決壊

宇治川沿川において多数の家屋が流失・損壊しましたが、これは上流にあった深谷池堤防の決壊が主な原因とされています。上流から流入してくる土砂と流水による水位上昇に耐え切れず深谷池堤防が決壊するや、奔流が滝のようになって一時に流出し、岩盤に達するまで土砂を洗い流し、その深さは 5m にも達しました。このため、下流部沿川は高所のものを除きすべて流失し、堆積した土砂で暗渠は数 m 下に埋没してしまいました。

決壊した深谷池跡には、石積みの砂防堰堤・宇治川堰堤（堤高 20m、堤長 67m）が内務省水害復興砂防事務所（現・六甲砂防事務所）により建設され、昭和 17（1942）年 8 月に完成しています。

■ 暗渠の開渠化を模索するも難題多く、やむを得ず暗渠のまま断面を拡幅改修する

宇治川の改修区間は、宇治川と平野谷川の合流点を起点として、宇治川は山手女学校（現・神戸山手女子中学校・高等学校）付近までの1.12km、平野谷川は奥平野浄水場の西側溪谷入口までの0.46kmとし、これに起点より下流の1.58kmを加えた延長3.16kmを改修区間としました。上流の溪谷部には流木止めを設けた砂防堰堤を築造します。

宇治川及び平野谷川については、いずれも川幅を広げ河床を切り下げて河積の拡大を図るとともに、急勾配なので所々に落差工を設け、河床は洗掘防止のため石張りとしします。

また、起点から橋橋までは暗渠を開渠に改築、川幅を10mとし両側は石積護岸、河床も石張りとしします。

橋橋より下流については、被害を大きくする原因となった暗渠を開渠とすることに重点を置いて検討されましたが、宇治川商店街等の繁華街を通過するため様々な問題が生じることから、やむを得ず覆蓋された暗渠断面を拡大して圧力暗渠として改築し、市街地の雨水は暗渠の両側に排水管を敷設して排水する計画とします。また、暗渠天端は直接道路面とし、適当な箇所に暗渠の天端を取り除くことが可能な構造としています。

以上の計画を基に昭和14（1939）年から内務省直轄（その後建設省）により砂防事業として流路工、流木止めを設けた砂防堰堤16基が、河川事業として橋橋より上流の河川改修が昭和30（1955）年に完成します。

しかし、橋橋より河口までの約1kmについては、神戸市の戦災復興による都市計画事業との調整等で改修工事が遅れたことから、県と建設省（現・国土交通省）が昭和26（1951）年から種々検討し関係機関と協議の結果、圧力暗渠の上流端に調整池を築造する計画を昭和35（1960）年に策定します。

翌昭和36（1961）年度より県の中小河川改修事業として、市の都市計画事業と調整を図りながら工事が進められました。なお、暗渠区間及び調整池の工事については、六甲砂防工事事務所（現・六甲砂防事務所）に委託しています。



図-1 宇治川水系図

この既設暗渠を拡大する工事区間には、省線（現・JR東海道線）、市電を始め、多くの道路や地下埋設物が交差しており、川沿いには銀行、百貨店（三越）、商店街等が建ち並び市街地のまっ只中ということで、工事には多くの困難が伴いました。騒音・振動に対する周辺住民からの苦情が相次ぐ中、市電軌道下の工事では、終電車通過後に軌道を撤去して掘削工事を行い、始発前に復旧するという非常に厳しい工程を組むなど、数々の問題を克服しつつ工事が進められました。

■ 昭和 42 年、再び悪夢が襲う

昭和 42（1967）年 7 月 9 日、台風くずれの低気圧が梅雨前線を刺激し、西日本各地に記録的な集中豪雨をもたらしました。「昭和 42 年 7 月豪雨」です。六甲山系では日最大 319mm、時間最大 76mm の豪雨に見舞われ、各所で山崩れが多発し河川は氾濫しました。阪神大水害後に建設された砂防堰堤によって大量の土砂の市街地への流出が食い止められましたが、阪神大水害に次ぐ大きな被害を受けています。

宇治川流域においても大きな被害が発生しましたが、このことで結果として工事の進捗が早められ、昭和 46（1971）年度末に暗渠拡大工事及び調整池工事を含む宇治川全川の改修工事が完了しました。



写真-4 昭和 42 年 7 月豪雨で宇治川商店街を流れる濁流（『六甲山災害史』から引用・加工）



写真-5 宇治川商店街「メルカロード」
宇治川 この道路の下を
宇治川が流れている



写真-6 宇治川調整池

■ 奥平野浄水場入口に立つ『流石之碑』

右の写真-7 は、神戸市水道発祥の地「奥平野浄水場」にある（旧）急速ろ過場で、京都の蹴上浄水場に次いで大正 6（1917）年に竣工したわが国最初期の急速ろ過施設です。

日本建築学会からの保存要請を受けて、平成 2（1990）年に、この館の保存活用を目的として神戸市水道給水開始 90 周年を記念した「水」をテーマとする科学館「神戸市水の科学博物館」として公開されています。

上記奥平野浄水場の入口に建っているのが『流石之碑』（写真-8）です。阪神大水害で 10 名以上の死者が出た楠谷町会が、災害時に流れてきた石に楠谷町近辺の惨状を刻み、昭和 14（1939）年 3 月復興記念のために建立したもので、揮毫は当時の神戸市長・勝田銀次郎です。

石碑背面の碑文は下記のとおりです。



写真-7 神戸市水の科学博物館
（奥平野浄水場（旧）急速ろ過場上屋）

題して流石之碑と云う。「ながれ」石と読むも可、「さすが」と訓するもまた佳なり。すなわち昭和十三年七月五日神戸地方一帯の水害は郷土史上未曾有の事象たり。当町を擁護する宇治・楠谷の両川も一瞬にして一大激流と化し、たちまち土砂・流木は河身を埋め、氾濫せる濁流は滔々と全町を浸し、倒壊埋没百五十余戸、呼こつ叫喚、難を浄水坂上に避くる者数百人、不幸生命を落とす者十有余名、流れて元町鉄道南側に到る九屍に及ぶ。この碑石も現位置の正面、宇治川の一角に流着したるもの、台石もまたおおく当日の流石なり。以ていかに奔流の激甚にして、悲惨を極めたるかを知る証左として、後世追憶の好資材たるべし。（以下略）

流石之碑



写真-8 『流石之碑』

■ モノローグ

阪神大水害における宇治川被災の特異性は、溜池の決壊と河川の暗渠化にあります。その暗渠化も、三越前付近を除いて昭和 8（1933）年時点ではまだ暗渠化されていなかったようです。

大正 14（1925）年の神戸市会において、「生田川の暗渠・遊歩道化及び埋立計画」が可決されたことによって生じた暗渠化の波は、昭和 5（1930）年 9 月に生田川暗渠化工事が完成したことで一層大きくなり、宇治川も呑み込まれてしまったようです。



写真-9 平野橋の袂に咲いていたエニシダ

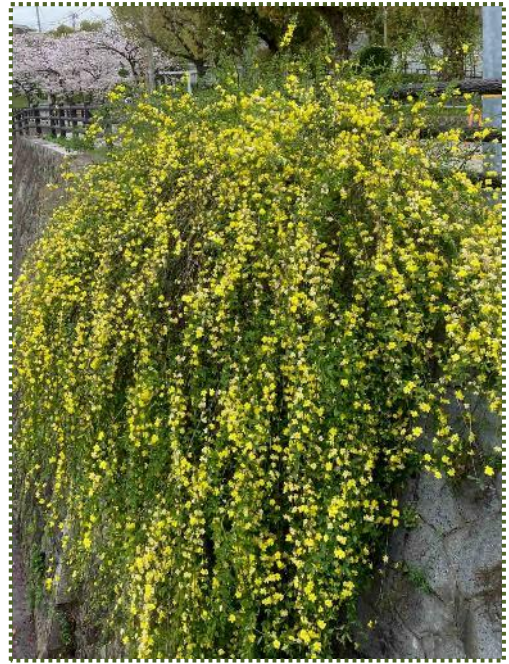


写真-10 平野橋の袂に咲いていたエニシダ

エニシダ

マメ科エニシダ属の半落葉性低木で地中海沿岸原産。江戸時代の延宝年間に中国を経由して日本へ渡来した。開花期は春。和名の由来は、ヒトツバエニシダ属（*Genista*）がなまったものとされている。全草にスバルテインなどのアルカロイドを含み有毒。西洋ではエニシダの枝からほうきを作った。魔女がまたがって空を飛ぶというほうきもエニシダの枝でできているという。鮮やかな黄色い花を觀賞するため、庭木や生け花の花材などに広く使われる。漢字表記は元々「金雀花」で、小さな花が並ぶ様を金色のスズメに例えたものだが、中国ではムレスズメを示すため、「金雀枝」や「金雀児」に修正された。

【参考資料】

- 1 『神戸市水害誌』 神戸市編 昭和 14 年 7 月
- 2 『宇治川水系河川整備基本方針』 兵庫県 平成 29 年 8 月
- 3 『六甲砂防六十年史』 六甲砂防工事事務所編 平成 13 年 3 月
- 4 『表六甲河川 宇治川』 神戸土木事務所 平成 4 年 3 月
- 5 『彩色絵はがき・古地図から眺める 神戸今昔散歩』 原島広至 平成 23 年 9 月
- 6 『奥平野浄水場（旧）急速ろ過場』 神戸市 HP
<https://www.city.kobe.lg.jp/a83166/kanko/bunka/bunkazai/history/isan/okuhirano.html>
- 7 『六甲山災害史』 社団法人 兵庫県治山林道協会 平成 10 年 8 月
- 8 『神戸市電、エニシダ属』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 6（2024）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.201

改訂：令和 8（2026）年 8 月 『ひょうご水百景』 No.201